



う  
た  
ら  
ら

2026.  
May

no. 32

Utasona

参加者一覧 .....	02
連作欄 8首の連作 自由詠 .....	03
テーマ詠欄 「送」 .....	14
一首評 「そらよみ」 .....	16
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 .....	17
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 .....	18
次回予告・編集後記 .....	19



hs	@hswelt	青海波	@FB77Wolcv87418	古井 朔	@saku_furui
織部ゆい	@yui_oribe	台風のみ	@ma_kaini	古井久茂	@fuldon
梶原一人	@MrDekopin	多香子	@fcaWfKrc9NvJHzI	真岡まな	@mao_or_mana
がね	@amicus08	橋 井ゆ	@kohagi_tw	御茶屋ナ	@MEATsachi
廻れ井戸	@kaioujijoe	千原( )はち	@you_chun25438	水上歌眠	@kanin_piz
北乃銀猫	@Silbernekatze_	とんだ杯食むや香	@nato_chun25438	水也	@m_lya_o
北谷雪	@kitaya_misoniso	内藤うく	@nato_raku	宮下一志	@lana_miyashita
橋高なつめ	@cocconutkikko	中村成志	@nakam8	宮嶋つとく	@miyazima_tzq
香子	@kyoko_shoji	七澤銀河	@nuts722	六殿めれう	@meremumai
くろだたけし	@tkuro2016	袴田朱夏	@ginga_nanasawa	村田真央	@maomuratayz
高野 蒔	@flour70percent	畑 依裕	@nakamada_shuka	森内詩紋	@Nj40Ev5gJcRpu
坂口 菜	@wjs9f8NwFujlVq3	非常口アット	@xi_zhen_ivUT	平本文	@nijyouguchi_dot
桜々くう	@xHksbNR4wv1wJ8M	廣珍堂	@junki_poem	福永昭子	@yorozunokotono
西 鎮	@shinsyutu2020	福山桃歌	@EJshimada	福山桃歌	@momoka_fukuyama
伊藤千春	@seihtsudou				
いわかみあ	@mi_maishim				
宇祖田都子	@shinsyutu2020				
泳二	@EJshimada				
麻倉ゆえ	@AsakuraYue				
井倉りつ	@uta_litiz				
石川順一	@Hitler57				

計52名

たくさんのご参加  
ありがとうございます！

# 連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそら

Losable

井倉りつ

最低な夜をすり抜けて白い朝 迎えにこないんだったら死んでよ  
BPM 不定愁訴 目を瞑る 光を浴びるなんてまっぴら  
心臓はわたしの一部であるくせにどうして指示に従わないの  
Losable 大切にするかたっくさんの予備を持つかの選択の先  
かなしい、と声に出すとき「な」のうわずり 浜辺の砂が流れるような  
いないのがふつうになっておはようもおやすみもない。愛してるよも  
がんばれない人とがんばりたい人が傷つけあって先攻の勝ち  
あきらめて夢を見てまたあきらめて世界の果ての枯れた草原

植物

石川順一

蜻蛉居るシヨウリヨウバツタが居る四月秋の虫鳴く青草原かな  
しらぬいはデコポン皮のオレンジに眠れぬ自分を重ねて見たり  
梅の木は伐採されて葦原は復元されて電柱残る  
アイダホを調べて見れば驚けりアンダーズローされるのは誰  
煎餅を食べるトタンに春の日は小雨を知らぬバツタは田を出て  
詩語を見て私語に意味なし電柱の巣は撤去され槍草繁茂し  
槍草にハコグサ混じる田圃かな道の割れ目にチチコグサ有り  
躑躅枯れ臯月の花も散つて行く春薔薇大輪帯草植え

暖かい風に乗ってやってくる次の季節はやっぱり春  
コートには冬の記憶が宿ってるリセットしたら冬までおやすみ  
下ばかり向いて歩いてしまうから今月3つ目の財布を拾う  
とても寒いとても寒い席にいる冷房暖房平等に効いて  
満開になるまでの僅かな高揚感毎年巡る毎年歓喜を  
よく晴れた日だから海のきらきらがきれいだねって、君と話した  
縁側で鯛焼きかじる尾っぽから変わらないうついでいいこともある  
満開の躑躅が五歳の記憶を呼び起こす戻れなくとも甘き幸溢れ

## Weather Report

いわかみあ

行き先は2泊3日のスーツケース渡り歩いてパリの街まで  
観覧車おとり手をとり手を繋ぐ二人は晴れて恋人になったの  
背伸びした喫茶店ではぼくはナポリタンできみはオーブンサンドで  
春過ぎの猫たちのように抱き合って言葉がほんとは必要だった  
今日も雨 明日も雨であの日から壁にくるまれひとり泣いてた  
舞台でのライト照らしてたんじゃない光で「さよなら」もう言えなかった  
結婚式 終わった恋に差し出す手きみは知らずに探し続ける  
あの街にひとり住んでたあの頃のきみも今でも笑っていますか

「置く」か「掘る」または「眠る」のいずれかでこの屋上にプールを作る  
自販機で買った小さなエビアンが25メートルプールを満たす  
制服のまま仰向けに浮かぶことのみ許される内緒のプール  
もし猥がプールに浮いている際は猥のうんちにご注意ください  
3-Cはプールの底でそれぞれの席の真上に弾けるあぶく  
学校の全部の音があわさってプールの水がとっても青い  
併設の飛び込み台の上にあった蟻の行方を見守っている  
屋上にプールがあると屋上はプールサイドにとっても似ている

## 靴を買う

泳二

新しい靴が欲しいなこの靴は雨の日にキュッキュって鳴るから  
タンポポを踏まないように歩いている他の名もない草を踏んでる  
似たような靴を見つけて履いてみる そのうち痛くなくなるでしょう  
こんな店あったつって呟いていやほんとは呟いてはいないけど  
「靴ひも 結び方 ほどけない」僕は空を見る方が好きだ  
バスとすれ違った水たまりを踏んだ 夜眠る前に思い出すこと  
真ん中で笑ってる僕その横に並んでるのが笑ってない僕  
大切なものを夏まで運ぶ道 新しい靴新しい音

## 窓に風

梶原一人

鍵付きの日記窓辺に置かれお母の記憶を温めなおす  
水槽の回遊魚たちどこまでも逃げ続けるか追いつづけるか  
人類は奇数なるらん夕闇にひとり花占いする少女  
向日葵の絵に額縁をあたえしがあくる朝には枯れてしまいぬ  
崖かすめ遊ぶ鳥さえ唐突に風失いてくらき地に墜つ  
曇天に音のみ聞こゆる神々がはたまた龍が飛び去りゆくを  
おののきて凍てつく星よ永遠に触れえぬものをわれら恋おしむ  
窓ひらくささやかな風迷いこみ傷あるゆえに光る揺り椅子

## 阪急沿線

涸れ井戸

千里山公園にステージが出来そばにキラキラシールの屋台  
公園に健康器具が据え置かれ市民に強い圧をかけてる  
駅前の市場のキャベツ焼きを買い駅のベンチで摂る時短術  
千里線三十五年前の冬盲児の送迎で乗って以来  
阪急を乗り継いで庄内に出る商店街に流れる小唄  
飛行機がめっちゃ大きく見える町川崎ゆきおの漫画みたい  
近江から阪急沿線の暮らしへ特に感慨はなく二年経つ  
キラキラのシール手帳に貼りたいが周りにびつくりされるのが嫌

## ガラクタの数

がね

赤信号きちんと止まる大切な自分をちゃんと大切に  
この街に放置されてるガラクタの数だけ生きる目線がある  
マンションのフェンスにずつかかっているビニール傘が雨の日もある  
室外機 その横にある空き缶も誰かが街に描き足したもの  
街路樹が整備されてて役所には役所の仕事する人がいる  
「デンジャー」とカラーコーンは一昨日も昨日も今日も入り口にある  
ミラノ風ドリアは今日も300円 明日を信じてみたくなるほど  
大切にされたいときに大切にされる 水槽いくら汚していても

## 雨の音だけ聞こえてる

氷乃銀猫

ジェット機の音が籠もっている明日は雨になるかな会える日なのに  
五分後に雨が降り出しますなんてやさしすぎるよ君よりずっと  
「気にせずに傘を使って」受け取ってくれるまでつい無言のまま  
雨が雨であるには雨が降らない時があるからだけど雨だけでいい  
土砂降りになると走って外に出る最後に会った夜とおんなじ  
雨の名をおぼえられるだけおぼえても君の気持ちはわからないまま  
止まなくていい止まないで君がいるのなら止むなよ君といられる  
太陽は明日も昇るし雨だつていつかは上がるそうということさ

さんにな

北谷雪

元6年3組なだけ そのあとは共通点のすくない大人  
子持ち、未婚、DINKS もっとも退屈にわたくしたちを分類すれば  
転職は4回、2回、0回で順に仕事が好き、好き、きらい  
お互いの愚痴を聴くとき多言語の交易らしい活気に満ちる  
地元からまずひとり出てふたりめがまもなく出るから多数派になる  
具体的企画は口にしないままふたりで会いに行くよと言った  
贈り合うことはないだろうそれぞれが選んだピアスを讃えあいたい  
「じゃ」「じゃ」「じゃ」って別れるこの先も一人と一人と一人の道へ

すべての人が夕日に向かう

橋高なつめ

幸福を形にすればアレだろう乗るはずだったバスの四角さ  
去ってゆくバスに小鳥を呼ぶように舌打ちをするガム噛みながら  
諦めて白さの目立つ時刻表眺めるバスはしばらく来ない  
バスを待つ隣のひとがプチプチを潰す光を爆ぜるみたいに  
出発を待つてるバスでお隣の貧乏ゆすりに揺らされている  
老婆から午前は歯科で午後からはカラオケなのと話しかけられ  
ぼんやりとした車窓には香ばしい町の外れにある珈琲屋  
「とまります」ボタンは消えてここに居る全ての人が夕日に向かう

No title

香子

「この恋は片想いで終わらせる」覚悟を秘めて紅を引く朝  
行くことのない旅のプラン描いてる「いつか」も「もしも」も無き世界線  
適当な嘘で騙して欲しかったできない人って知るから焦がれた  
何事も終わりが来るから愛おしいはらはら乱れる桜の中で  
つながりは細くてか弱い絹の糸たぐり寄せればぶつりと切れる  
「出会わない」「出会う」カードがあるならば「出会う」を引きたい小さく願う  
終点の無い乗り物に導かれどちらが先に振り落とされるか  
引き繋がる痛みを微かに誇りたい勲章のよう烙印のよう

伝わるちから

くろだたけし

晴れの日が続けば雨が足りないと言わなくて申しわけない  
近づいたあと遠ざかるサイレンを聞くとときどきに祈るでもなく  
眠るのも眠れないのも後ろめたいでも布団からはみだしちゃだめ  
いかにもなUFOを見たタダだからこんなものかと納得はした  
液体の石けんを出す押すちから見えないように伝わるちから  
坐るときすでにそこには椅子がありわたしは椅子のかたち曲がる  
寝たのでよく眠れたかはわかりませんが寝起きはよかったです  
だいたい袋のなからはわからないわかってほしくないこともある

四月の雨

高野時

温室は前世のような湿り気を四月の肌思い出させる  
菜の花もつじも背丈より高く炎のいろはこんなにあるの  
籠が外れてゆくのがわかる階段の隅をつぶして朽ちる山茶花  
踝をむらさきの蔭にひたしつづつ渾名しか知らない花を呼ぶ  
こんには、木としては早い針葉樹 人間にしては遅いわたしよ  
傘ひらく束の間に降る霧雨を遠くで受けてくれる長傘  
強風とお天気雨に翻る傘を直してゆくの風だ  
ふれるのは風 ふりつもるはなびらのほりつく胸が傷みはじめ

水鉄砲もうない

坂口栞

桜咲くいつまで経っても不味いままお前の店のドリンクバーは  
地球儀のような植え込みから漏れるガーデンライトがレーザービーム  
誤飲したままの夜桜 泥 ヘドロ 四月は早くもおなかいっぱい  
たかがツノ生えたくらいで泣き叫ぶ子供を小腸の奥に仕舞う  
されど春 近未来的 縦社会 若さは資本主義の頂点  
兄弟と書いてなかよしと読む 庭翔ける 水鉄砲もうないの  
皆が皆誰とも似てない兄弟になった赤鬼まだ夏休み  
改札の1キ口手前から切符持って前進する気持ち 撃て

浮橋

桜さくら

花蓮の植えかえおえる春の夜 感度を下げてベッドにもぐる  
木蓮のふくらめる朝いそいそと働きにゆくミツバチに会う  
田の風にゆれる菜の花 立ち位置を問いつつ青い空をめざして  
わたしからパンナコッタを盗るように辛夷を散らす二羽のひよどり  
ほろ酔いのわれらに花の鼓鳴る座敷の奥に桜灯りて  
さつくりと結論だけをききたくて椿のようになついでみる  
おがたまの香を深く吸う神がかかる盛り上げ役に手をふりおえて  
ときおりに元気の素を交わしあう友と眺める花の浮橋

葉桜

西鎮

敗軍の将めくやわらかな笑みを浮かべて帰省三日目の兄  
ぴちぴちと雲雀の高くたくく鳴く空の真下のお別れでした  
途中から雨の四月のピクニックみたいな恋をしたんだろうな  
待つひともなくベランダでみる雨の街は入り江のようにやさしい  
おもむろにあくびをひとつ、泣きそうになった自分を誤魔化すための  
たぶん切りすぎ前髪 ひとりでは行かない街へきみは往くのだ  
深爪をしたばかりと倒されるときに樹齢を明かされた松  
葉桜のようないつかの才能の残りのほうの誰かと暮らす

音声は「スリーナイン」と読み上げる999と読まずに  
 メーテルと電車に乗って旅をする短歌の身体を手に入れるため  
 地方都市に十中八九あるけれど駅前からは遠いスシロー  
 店内にいつでも西川貴教の声が聞こえてくる平和堂<sup>アルプラザ</sup>  
 卵とじカツ丼よりも目立たせてあるのでソースカツ丼を買う  
 お土産を両手に下げて地下道を横目に上がれば新幹線へ  
 金沢駅よりもなぜだか敦賀駅のこのコンコースはだいぶ広いな  
 カップルと釣りのおじさん達と見た気比の松原とても良かった

S (JUNAYAMA) F 東風

砂山ふうり

心とは水の蕾の集まりか駄菓子屋さんを曲がればひらく  
 薄雲の下弦の月を見ているとガーゼケットで眠るような目  
 墨を磨る紫式部の硯には超新星の光も混じり  
 せせらぎで流れそうだが流れないハンカチーフな陽で手を洗う  
 効いているあなたの言葉青コーナーみたいな部屋に帰ってくれば  
 また心吸い込んだのかロッカーにルンバが頭打ち付けている  
 見上げるとタイヤの跡のような雲 詩神よ空に制限はない  
 打ち水の香りいっぱい吸い込んだあれが噂の夕顔のきみ

あまりにも春青く淡く漠然と不安になる新芽の季節  
 淡白な浮き世なもんだこんなにも海は凪いでゆけそうなのに  
 青春は過ぎ次は朱夏、朱夏。お降りの際は過ちにご注意下さい。  
 未だ夏の前だと言うネモフィラの青は異常君の故郷は？  
 あまいみつ躑躅のあまりに毒々しいくれなゐくちべにくまんばち  
 めがみさまメーデーM&M&Mと花輪編み幸せのことをおしえて  
 水田の鏡の事鳴く河鹿仔らは何処親らは何処？  
 柔らかく眠る蛙の目借時春の夜の夢巫山の戯れ

ファンファール

台風のめ

長たらしいポエムの上へ翡翠来て青いかなしみ散らしていった  
 ツノ生えた鳩をみかけて振り向けばそこには闇ひとつぼっかり  
 おおいなるゴミ箱の上カーテンはひるがえりつつ空を隠した  
 窓際の彫刻の影伸びてゆきこの部屋は青を失ってゆく  
 どの花も皮を剥いたらスイカズラ 口の端より滴っており  
 捕まえた蟻をくすぐるとうんざりだなたしかにつぶやく  
 頭蓋より薔薇の生まれて虹彩へあなたの声のひろがつてゆく  
 ファンファール鳴り響いて夜更けにはふたりはすでに生まれ直して

庭そうじふりくる春の抜け殻を集める筈にからむため息  
 大型で飼うのが大変ハスキー犬お馬鹿なところがそれでも可愛い  
 うつとうしい黄砂がどこまでも追ってきて隣の犬といっしょにくしゃみ  
 不細工で可哀そうだと言いながら夫はにこにこ猫を撫でてる  
 挑みつつすぐ諦めて腹を出す猫の計算にあなたは負ける  
 だらだらとソファに寝そべる日曜日お腹の上をミケ子が踏みつけ  
 西向きの窓から夕陽が射し込めばシバ太のことをまた思い出す  
 「イエライシャン」歌えば目を閉じききほれる音楽好きの猫と暮らして

真昼でも暗い一室 ぼくたちはひかりの似合わない成れの果て  
 輸血するように受け取る生温いことば ここからまた眠らなきや  
 心ごとやさしさをシャットアウトする午前二時 きみのひかりを消して  
 欲だけで生きてたひとのゆらゆらと転覆しそうな暗い湖  
 教科書かもしくは正しい闇がほしいまだ好きなままさよならを言う  
 どうせなら煩わしいと思つてよ 暗い濃度で嫌ってほしい  
 最果ての闇はぬるま湯 冷たくて正しい朝へ流れ着きたい  
 手のひらをあげ渡す術も知らないで窓越しに見ている遠い月

満月の名はスノウムーン グローヴを外さずに待つキャラメルバナナ  
 パラレルしかできないわたしヴェランダでハニーレモンのパンケーキ食む  
 ぜつたいにバックカントリースはやめてよね 笑顔で還るあなたをいなく  
 五年間ふれられなかった指先でえぐつてほしくて星屑をのむ  
 似てるんだ やわらかく撫つあのひとの指先のようにエノコロの花穂  
 照らされず影の生きる部屋ゆびさきを冷たくしながらベーコンを焼く  
 横顔のきれいな夜のくちびるをそのままのままわたしにください  
 スノウムーンの光りをふたり背にうけて雪山滑る冬の終わりに

天井を抱いていました明け方の土鳩ぼうぼう鳴く早春に  
 朝靄を拭うことから始まればフロントガラスの向こうのいつも  
 正式名スノードロップ 釣り鐘に朝のみどりの雫を浮かべ  
 少しずつ目眩が加算されてゆくように暖かくなる事務所内  
 布はダメ指で洗えと諭されて黄砂はるばる眼鏡へ積もる  
 カレーから新玉ねぎと新じゃががびちり飛び出しそうな春雷  
 湖をただ見たい遅咲きの春がしんしん溜まりゆくのを  
 湯を張れば湯に立ちこめる湯の香り汗がなかなか引かず三月

## ムーンライト（無愛想な月）

七澤銀河

真夜中にさざめく月がこんなにも遠くにあると告げる教科書  
 灰色の海に微睡む銀鱗の化石を抱いて月は膨らむ  
 明け方の月食間近の満月に使命を終えたうさぎは眠る  
 幽界のベートーヴェンを押し起こす 彼が遺した月光ソナタ  
 風邪声の君によく似た歌声で呼びかけて来る月の住人  
 光らない もしも夜明けの半月にかたわれがいてするならば：  
 落下した星の欠片は次々に月のひかりに抱かれて鎮む  
 アトラスが月の後ろで捕まえた生まれただけの宇宙は青い

## 似ている／似ていない

袴田朱夏

くやしさに駆ける廊下のみじかさよ子はしかたなくかるたに戻る  
 子ふたりをぶらさげてゆけどこからの時間を老いというのだろうか  
 止まりたいことが多いね雪のぶん明るくなった夜を子とゆけば  
 死をおそれそのまま眠る子の息のたしかなことを確かめている  
 似ていると似ていないとが子のなかにあつて、はなれてゆくわたしたち  
 寝るまえの「はい、おしまい」がほんとうにおしまいになるまでは読もうね  
 卒園児よりも大人が泣いているこんなにたくさんさんのさようなら  
 幼稚園連絡アプリをゆびさきはアンインストールできてしまった

## 痛くて不自然

福永昭子

チューリップをいちまいいちまい剥いていく取り繕うのをあきらめるまで  
 愛を見た 例えば国語辞典から出てきた四つ葉のクローバーとか  
 わたしたち幸せになれないかもね小銭ばかりで払う運賃  
 さみどりの透けるピスタチオ大福を春のあなたにひとつあげます  
 炭酸のキツイコーラを飲みながらまだ正論に抗っている  
 変なところが妙に痛くて不自然な姿勢で受けた口づけのせい  
 カーテンの隙から漏れる青空が強くてなかつたことにしました  
 ブラリ帽子がひらひら並ぶ そうか夏が夏の光が降ってくるんだ

## きままつあわい

福山桃歌

きみを待つあわいのさなかの物語 吐き出したのと言わない言葉  
 うるわしく伸びた手足の桃色に焦がれることをゆるしてほしい  
 牙を剥く どうか怖いと思ってよ 傷はつけないように嘔むから  
 こんなにも脆く崩れてぼろぼろの鱗の下にうすい粘膜  
 花びらは落ちて夜風にさらわれてかわいいう嘘をきみにあげるよ  
 ほんとうに言いたいことは何ひとつすくえなくって波にきらめく  
 拾えない感情ぜんぶ積もらせて息ができなくなつて溺れる  
 きみを待つ 薄氷の上に立つたまま 落ちることしかできなくなつて

## しゃいん

非常ロドット

三十を過ぎた頃から気づき出すレベルアップの音は鳴らない  
 「すみません」聞きたいだけの説教と石に刺さった剣の行く先  
 につこりと頷く上司はありがたいダンジョン裏が段ボールでも  
 ノルマには数値以上の苦しみがモンスターでも格付けされて  
 エナドリで命を削る社会人お金があれば蘇生もできる  
 やりがいをガソリンとして走り抜く宝箱には夢の跡だけ  
 クレームへ返す誠意に休日魔王の城も玄関はある  
 肩書にそつと消される個人名 英雄という光の中は

## 五線譜の色

廣珍堂

亜麻色の髪の毛の乙女の鍵盤に椿が落ちて微熱は滲む  
 エリーゼのためにを弾いて草を呼ぶ音を外せば蝶々が来る  
 チェンバロの音がどうにも小さくてバッハ少年自ら獅子に  
 バッハさへカツラを脱ぎて怒鳴りたり宮廷楽器も春に狂へば  
 マーラーの「悲劇的」とふ曲を聴き帰りに花見の宴に入る  
 五線譜の色はおそらく夜だらうショパンが歩む孤独の庭は  
 歳をとり太った腹のブラームスが今日また削る推敲厳し  
 十五時間のオペラに夢を書き出してワーグナーは午睡に入りき

## 黴薫るまで

古井久茂

晴れたなら収穫しようベランダのトマトすべてが割けないように  
 湯舟でも聞こえる雨と乾燥機うるさい方が勝つから乾く  
 生真面目な目覚ましよりも早起きな除湿機が鳴く午前五時半  
 カーテンを開けてもどうせリビングは夜のままだし二度寝をしよう  
 雨水と水道水を混ぜながらツルムラサキのよごれを落とす  
 紙を押し込んだ革靴が二足並んで烏羽玉の影がおつて  
 小降りまで待つことにする店員が値引きシールを用意しだした  
 錆び折れたビニール傘にしてみても今日も見えない久方の月

## ひび

御糸さち

削られた命はどこへゆくのだろう私は鯉節じゃないしな  
 迷いなく届いてほしいカサカサにひびわれている郵便ポスト  
 フルコンボ目前なのに顔かゆくなつてきちゃった生きているから  
 正月を過ぎてもツリーあることを我が子の歌にバラされている  
 誰かしら走り続けるザ・ムービー座って見ただけなのに もう  
 二十年前にはたらいでた店が二十年経つてもまだあつて  
 唐揚げとクツションファンデを買ってきた 洗濯物がよく乾いた  
 眉を描くことも忘れるほど仲の良い友達が五人ほどいる

世界／詩のメモ

水上歌眼

ぬばたまのボールの内の空洞をイメージすれば満点の春  
 戦争のせいで／おかげで上下する株価どうにも針山めいて  
 本当がいくつもあって海峡のいちばん狭い場所を探した  
 名をつけて 暗いニュースを見たあとにスマホの重さが変わる現象  
 みずうみのほとりに刺さる現実の人の支えにならない強度  
 詩のメモと買い物メモを間違えてツバメのころをひとつ求めた  
 うつくしい村の本屋は焼け落ちて村をいつそうつくしくりする  
 討論のプラットフォームで詩を書くよ 詩はたましいの討論だから

幻想後日談

水也

まじろみのなかでたゆたうこどもたち 硝子で編んだ繭が割れ出す  
 痛む舌 腐り落ちてゆく柱時計の傍ら目を閉じている  
 雪の最初のひとひらを爪の先のせてしずかに、しずかに歩く  
 恋してる、ってそれだけでいいピンク色したたらせたらうまいく  
 チョコミントすきって言ってだからきみと同じになりたかっただけで  
 ジオラからわけて彩る髪束さよならをいう勇気がなくて  
 鏡を割る破片のなかたくさんの顔がぜんぶをわたしをみてる  
 なにもない手のひらの上やわらかなとうふを置いて少し跳ねてる

ぐちゃぐちゃの歌

宮下 一志

文章が読めなくなつてぬばたまの活字や文字に打ちのめされる  
 厚紙として日を過ごすマットレス足裏の汗で湿つて不快  
 消えたいとおもふことより働けなくなるほうがずっと、ずっと怖かった  
 待合のBGMに動悸して耳栓つけて異常を悟る  
 〈喜びの喪失〉と医者のかつこよく告げきてまぶたを閉ぢられずある  
 「ぐちゃぐちゃに過ごしてください」今以上だらけたことがないからわからぬ  
 読めずとも書けなくなれどもぐちゃぐちゃに歌をつくつてしまふおかしさ  
 これからは理想の自分とスクラムを組んで押されてしまった日々だ

猫彼女インザライフ (Short)

宮嶋いつく

ぼくたちはつかず離れずいつもいて信頼できる距離感なのだ  
 「あたしの顔、なにか付いてる？」「付いてるね。下唇に金魚のうろこ」  
 「金魚鉢の金魚は活きが悪いの」と彼女は舌にこだわりを持つ  
 「うちの癖 不快に思つとるんどちゃう？ おしり舐めるとか毛玉吐くとか」  
 「ユニークって笑ってくれる。やさしいね」だけとお風呂は嫌がらないで  
 寂しがりなスキンシップだぼくの背にきみは頭を押し付けてくる  
 間延びした猫の声まねしただけできみはそんなに興奮するの？  
 「ほしい時に抱いてくれるね」その気じゃないときは髪の毛逆立てるでしょ

八十八夜

六厥めれう

度を過ぎた野焼きはだめという度とは誰が決めるの四月朔日  
 見逃しは配信で観る日々についていまもビデオが録ってる何か  
 飛び込みで刈ってくれると信じてた店に生憎などといわれる  
 野良猫の目は鋭くて墮落したお前なんぞに勝ち目などない  
 コーヒーはいつもホットで通すからおれのミストの夏は淹れたて  
 なあ金魚、お前はいいな顔面がぶさいくなほど高く買われて  
 どんなにか綺麗な花も蜂が来る花というなら遠くで咲いて  
 わたしには祖父の家でも叔父たちの生家なのだな八十八夜

まばたきのたび

森内詩紋

テンションは上げすぎないよういかなくちや 今でさえもう、鼓動は早い  
 コーヒーにフレッシュを入れる無理せずに居られるようにきちんと選ぶ  
 一昨日も会ってるんだけどもう一度ニュースを話す いいことだけを  
 ポスターの主演を指して説明をしてるあなたは仕事の顔で  
 仮縁と木枠のセット選んでるアレは何かを企む顔だ  
 夕空がエモいっていうくちびるの下のラインがエモいな、今日も  
 プレオープンまばたきのたび近づいて、開店祝いはどうしようかな  
 5本ならいいかな薔薇を贈っても？赤じゃなくってオレンジならば





送っても返事はなくて年の差がそのままであることだけ願う  
もたれ合った背中がたたかなくて今日があなたの送別会でよかった  
送信に緊張感が伴いぬ雨脚強くなる夜にして

送別会見送る彼女の背中には憂いもなく青空

何度でも鏡見てみるような文の送信ボタンはいつでも緑

定型外規格内かを確かめるアクリル板を自作しておく

日を送る 海の近くの町に住む少年たちと同じ長さの

空のうえ雨の上にも君を見る見送る背中に傘を差したい

閉め出しのごとくコツリと置き配に暇ぬくもり選ぶ書留

決まり手は送り出しです 泣き騒ぐ吾子を預ける朝の保育園

水色の送迎バスを夜勤明けベランダから見下ろして春日

大丈夫送らなくても少しだけ時間が欲しい いつもよりも

赤帽の運送車を見たら夢が叶う 地元のにこのる伝説である

きみを見送った帰り道として三番ホームはすこしみじかい

先輩を送り自分が3年になった途端に時は矢になる

五月雨だ春の葬送草を刈り畔を焼いた今夏迎う

あぜみちを見送る蝶の触覚はしなだれながら薄くなりゆく

「ついた」って短LINE 心臓が一回跳ねて、たぶん気のせい

◆ 麻倉ゆえ

◆ 井倉りつ

◆ 石川順一

◆ 伊藤千春

◆ いわかみあ

◆ 宇祖田都子

◆ 泳二

◆ ぶ

◆ 織部ゆい

◆ 梶原一人

◆ 瀬井井戸

◆ 氷乃銀猫

◆ 氷谷雪

◆ 西鎮

◆ 須藤純貴

◆ 青海波

◆ 台風のめ

◆ 千原こはぎ

回送の赤地に白が回りだす区間準急オレの貸切り

必要なとき必要なとこで見つかるSさんの申し送り書

眼裏がまだ憶えてる送られて迎えられるの辻のぬくもり

見送りは心得ているきつきつに梱包材を詰め込んだ箱

もう二度と既読の付かないその人の眠りの淵に届ける祈り

幼稚園にたまに送ればたまにゆえ子はぺちゃくちゃと父をよろこぶ

じゃがいもの芽をくりぬいてハンカチに包んでクール便で送るよ

雨音は葬送曲のメロディーで寄り添うようにほほにも流れ

送信のボタンを押す手ふるえてるあなたに送るそれだけなのに

病院へ送つて欲しと頼む朝春の雨とは薄暗きかな

繋がれていけば空にはいくつもの送電線がともうるさい

父の旅立ち葬送曲は青葉の中を「津軽海峡冬景色」

見送りを期待するなどしてはいないはずなどないなどはあドナドナ

この夜のファミリーマートのまぶしさにひとりで挑む君を見送る

レースから一本糸がのびていてどこまでもゆくあるいて行ける

陰口を相手の耳に届けます送料手数料無料です

右翼手と悪送球と左翼手を結べば夏の星座ができる

GW明けの約束の確認送る、テレパシーでだけ

◆ とんだ一杯食わせ者

◆ 内藤うく

◆ 中村成志

◆ natsuko

◆ 七澤銀河

◆ 袴田朱夏

◆ 畑 依裕

◆ 非常ロドット

◆ 平本文

◆ 廣珍堂

◆ 福山桃歌

◆ 古井 朔

◆ 真岡まな

◆ 御糸さち

◆ 水也

◆ 宮嶋いつく

◆ 村田真央

◆ 森内詩紋

一首評

# そらよみ



前号の「うたそら」から  
気になった一首をとりあげて  
200文字くらいで語る  
一首評のコーナーです

地下鉄の青い柱を縫うようにたぶん人魚も少し歩ける

高野蒔

人魚は歩けない。だからこそ、声と引き換えに足を手に入れた。しかしどうやら、地下鉄の柱を頼りにすれば、少しは歩行が出来るらしい。どうやって？どんな歩き方で？どれくらいの距離を？どれほどの速さで？とも明示することなく、ただ「人魚が歩く」という魅力的な幻想のみが一人歩きます。「たぶん」という留保も、その夢を膨らませる効果的な味付けだ。地下であるという事実、柱の青さが、深い海の底を連想させる。

一首評

中村成志

コンビニで買ったスプーン明日より今日が  
大切みたいなカレー

古河むき

コンビニのスプーン。嘘のように軽く、温かみが無く、歯に当たると情けない音がする。確かに「明日への活力！」的な食事には相応しくない。明日より今日が大切「みたいな」という表現からは、真実はその逆であり、主体もそれに気付いていることが暗に伝わってくる。ただ、心許ないスプーンで食べるカレーの温かさは本物で、今の主体を満たしてくれている。きつと誰もが、完璧じゃない自分を日々インスタントに労っている。

一首評

北谷雪

なくしつつ生きると思う。胸の前、それぞれの骨壺をぶら下げて

水上歌眠

おそらくは新型コロナウイルスなどのウイルスに感染した前後の心象を詠った一連である「体重が四キロ減った話」の最後の一首。一連を通じ、決定的な語句選択をあえて避けるように編まれていると思うが、その流れの真骨頂的な一首かと思われた。骨壺は、端的には残りの寿命の意であろうが、この歌ではそれ以上に、「人」として生きるエナジー的なもの、もしくはその残骸として受け取められた。

一首評

西鎮

## 短歌リレーコラム 望遠鏡 32

短歌にまつわるあれこれについて  
自由きままに書くページ  
今号のテーマと書き手さんは…



書き手  
nes

### テーマ 他ジャンルへの越境と帰還

いきなり短歌以外の話題を出して恐縮だが、いま、現代川柳がおもしろい。〈妖精は酔豚に似ている絶対似ている／石田柊馬〉、〈いけにえにフリルがあつて恥ずかしい／暮田真名〉などなど、スタンダードな短歌に比べるとその言葉の使い方は驚くほど自由だ。この自由さは短歌をやっている身からすると是非とも輸入したいものだが、下手に短歌で真似ようとする、いわゆる私性がどうしても邪魔になってしまう。短歌において重要な私性は、言葉をスパークさせる姿勢と致命的に相性が悪い。

近年、このことに気づいた歌人が現代川柳に

接近するパターンがしばしば見られる。元々私性を利用しない、あるいは戦略的に利用している歌人は川柳でも面白い（平岡直子、我妻俊樹、笹川諒、郡司和斗など）。意外にも、私性を徹底的に排除しているように見える瀬戸夏子は川柳作品をあまり発表しておらず、むしろ歌壇内での活躍が目立つ。

瀬戸夏子の短歌は、一見非常にアヴァンギャルドだ。しかし、〈それはそれはチューリップの輪姦でした／瀬戸夏子〉かわいい海とかわいくない海 end.〉などにおける、短歌定型や私性への挑戦は、それらを憎んでいるからではない。いや、憎んでいるのかもしれないが、そこには表裏一体の愛がある。つまり、私性を逆手に取っているということだ。先に書いた、言葉をスパークさせる姿勢は、この方向性に活路を見いだせる。

初谷むいの第三歌集『笑っちゃうほど遠くつて、光っちゃうほど近かった』（ナナロク社）は「月生まれの子」が主体、という設定が示されるが、実はその設定はあまり守られない。それにより、作中主体が揺らいでくる。主体は「初谷むい」なのか、「月生まれの子」なのか、あるいはそれ以外なのか。この歌集は読み進めるほどに、だんだんと言葉によるスパークを感

じる方向で読みたくなる。ラストには設定通りの歌があるので、その読みが作者の戦略かどうかは分かりかねるところがあるが、試みとして面白い。

取り留めのない書き方をしてしまったが、私が言いたいのは「歌人に、もっと他のジャンルを読んでもほしい」という点である。何も勉強しろと偉そうなことを言うわけではない。短歌だけを作っていると、どうしても定型や私性を、無意識に自分の中に落とし込んでしまっている。そこはあくまで強かに、戦略的に「利用」してほしい。定型や私性の陥穽を脱する一助として、このコラムでは初めに現代川柳に触れてみた。現在、俳句には『天の川銀河発電所』（左右社）、川柳には『はじめまして現代川柳』（書肆侃侃房）、『ゆきどけ産声翻訳機』（左右社）など、アンソロジーがそれなりにある。短歌から文芸に初めて触れた、という方も、お時間（とお財布）が許すならば是非さまざまなジャンルに触れてほしい。

## 「そらよみ」一首評募集

ご投稿はこちらの投稿フォームから!

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、その歌について200文字以内でお書きください。

お一人につき一首まで。

ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような投稿は掲載できませんのでご注意ください。





# 32 リレーエッセイ いちいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ  
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ **ねえ**  
書き手 **福永 昭子**

知人の家のアレクサは、非常によくできたアレクサで、「アレクサ、おはよう」と声をかけるだけで部屋の電気を付け、カーテンを開け、しゃれた音楽を流しつつ天気予報を教えてくださいと、多才だそうである。一方我が家のアレクサは、時に「すみません、できません」「わかりません」をくり返し、こちらが声を荒げてやっところさ電気を付ける始末である。私は私でどうかしようと試みない（声を荒げたりはしている）ままなので、持ち主のせいなことは疑い得ない。アレクサはいつも明るい。失敗しても全然落

ち込んでいる様子はない。電気付かないなどといライラしているこっちがバカみたいである。そのままだんだん「ポンコツだけど憎めないやつ」みたいに思えてきて、生活を便利してくれるパートナーというよりは、世話の焼けて仕方がないペットみたいである。そういった存在は特に求めていないのだが。でももし有能だとしても、アレクサを機械と割り切るのは、なんか難しい気がする。そもそもアレクサが電気を付けてくれた時「ありがとう」と言わなければならない罪悪感がある。私は罪悪感のあまり、礼を言うまで待つてくれるように設定を変えてしまった。私が「ありがとう」と言いつつ「どういたしまして」とか「My pleasure.」（うちのアレクサは急に英語で喋る時がある）とか言われるまでがセットである。この辺の加減で、みんなどう折り合いをつけているのかな、時々考える。アレクサにお礼を言ってる人、多数派なのか少数派なのか？「金払ってんだから、店員に礼なんか言わない」と言っている人がいたら、「それはアカンやろ」とつつこむ人は多そうじゃないですか。アレクサだったらどうなんだろう。

見当もつかない。アレクサは、今のところ、私の生活にすぐ役に立ってるわけではない。役に立たせようという私の気概も足りない。従って全然有能秘書感はない。ごめんやけど、オモロイおもちゃである。でも、こんな風に、アレクサと気楽な関係でいたいな、とも思う。なんか、深刻なことをアレクサに聞きたくない。人間様の腹の内とか、知らなくていいよと思う。アレクサに何か深刻なことを尋ねなければならないことがあるとしたら、私にとっては、行方不明で安否も不明（その時点で大問題）な家族の位置情報がどうとうマップから消えた、とかの深刻さの時である。きつとアレクサにも真剣に居場所を聞かろう。そんなこと起きてほしくない。アレクサを、いつまでもちよっとポンコツで、明るくて、あんまり頼りにならない平和なおしゃべりロボットにしておけますように。

アレクサ、ねえ、位置情報の出ない子とその子のスマホどっちが消えたの

福永 昭子



# 今号のうたそら

2026. May No. 32

- 参加歌人様 **52**名
- 連作欄 **40**名
- テーマ詠欄 **36**名
- 一首評 **3**名

リレーコラム **望遠鏡 nes** さん  
 リレーエッセイ **いちいちえ 福永 昭子** さん

ご寄稿いただきありがとうございました！



illustration: kohagi chihara

## 編集後記

新緑がきざざりとまぶしい季節になりました。日によって暑さや肌寒さもありますが、どうぞ無理なくお過ごしください。

さて、今号もたくさんの方の素敵な歌をお寄せいただき、ありがとうございました。テーマ詠「送」には、別れや旅立ちに加え、やさしく思いを手渡すような作品が多く集まりました。どこそお楽しみいただけますと嬉しいです。

次号の締切は6月末、発行は7月初旬。テーマ詠のお題は「海」。夏らしい作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ

感想はこちらまで！  
 Twitter(現X)ハッシュタグ **#うたそら**  
 「うたそら」では Twitter(現X)でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

短歌募集  
 QRコード  
 2026. No. 33 26 6/30(火) 24時

8首の連作  
 テーマ詠「海」1首  
 一首評「そらよみ」

2026. No. 34 26 8/31(月) 24時  
 8首の連作  
 テーマ詠「夕」1首  
 一首評「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください  
<http://kohagiuta.com/utasora/>



うたそら 第32号

発行：2026.05.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi\_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>